

5. 参加型保全活動の展開に向けて

(1) 参加型保全活動の位置づけ

これまでみてきたとおり草原保全には幅広い方策の組み合わせが必要であり、参加型保全活動はその一部を占めるに過ぎない。しかし、それがもつ意義は多面的である。参加型保全活動の意義について整理し、位置づけについて検討すると以下ようになる。

人手の確保

野焼きや輪刈りには多くの人手が必要だが、現状は畜産農家が減少し、それが集めにくくなっている。直接的にはこのような人手不足を補完する役割がある。

問題の周知や関心の拡大

参加者の募集、行事の開催等を通じて草原問題を広く世間に知らせる意味がある。また活動体験を通じて都市からの参加者自身の草原問題に対する認識が深まり、意識が啓発される。また、問題を考える輪が広がっていくことによってより広範囲な人々の関心を集め、そのことが例えば草原募金への理解やあか牛消費の拡大にもつながっていくことが期待される。

新たな自然体験機会の提供

参加型保全活動は、一種の参加型、体験型自然利用の機会ということもできる。阿蘇の草原は人々の営みの結果として維持されてきたものであることから、草原保全の活動に参加することは、同時に地域の生活や文化を体験する機会ともなる。換言すると、草原を知るだけでなく、地域をまるごと体験し、人々と価値観を共有する機会となる。

地元の人々の意識の触発

野焼きや輪刈りは危険を伴う作業であり牧野組合主導で行なう必要があることから、参加者との交流や指導を通じて、牧野組合員自身が草原の価値やそれを維持する役割を再認識し、郷土意識や自信を回復するという意識面の効果が期待できる。

新たな観光への展開

で述べたような「自然体験」型の活動は、ボランティアによる保全活動だけでなく、草原利用のあり方として潜在的に広く求められているものと考えられ、保全活動はそれを促進する一つのきっかけになるものである。すなわち阿蘇地域に、草原を基盤とした新たな観光や都市・農村交流を展開していく気運をもたらす。このような意味で観光の活性化や、それを通じた地域づくりへの貢献が期待される。

以上のような位置づけから、ここで参加型保全活動という場合、単にボランティア参加というだけでなく、消費者としての都市住民の参加や地域の農業者以外の人々（例えば観光業者）の参加も含むものと考えたい。

(2) 野焼き体験・交流会の試行と明らかになった課題

1) 試行の概要（詳細は資料編参照）

野焼き体験及び交流会の趣旨

本プログラムは、住民参加による草原の維持保全活動のために試行的に策定・実施したものであり、このプロセスを通じて参加型保全活動の進め方を検証し、課題を明らかにすることをねらいとしている。

「野焼き体験」は、地元の原野管理組合の協力の下、懇話会委員及び地元関係者やこの問題に関心を持つ一般住民等が実際の野焼き作業に参加し、体験を通して野焼きを理角草すること、また、「交流会」は懇話会委員と地元の牧野組合員、一般参加者などが交流を深め、草原維持について意見交換を行うことを目的として実施した。

日 時

：平成9年3月17日（月）

（野焼き）12：00～16：30 / （交流会）17：00～20：30

場 所

：阿蘇町赤水原野／交流会は「百姓村」

赤水原野は阿蘇町の赤水原野管理組合（現在の組合員数：173戸）の入会地で、中央火口丘の北西斜面に広がる。今回野焼きを行った場所は、整った形で有名な米塚（954m）に近く、原野の中を阿蘇登山有料道路（赤水線）が走っている。赤水牧野組合によって放牧、採草に利用されているが、近年採草利用は少なくなっている。野焼きの作業場所は一部を除いて比較的傾斜が緩やかで、ボランティアの作業場所としては適していた。アクセスの点においても近くまで自動車を利用することができる便利な地点にある。

野焼き参加者

：合計270名

（うち、一般参加者120名、地元原野管理組合員150名）

（一般参加者（120名）の内訳）

懇話会委員	7名	国関係者	12名
県・町村関係者	16名	牧野組合関係者	3名
一般参加者	54名	パークボランティア	11名
事務局スタッフ	17名		

2) 野焼き体験・交流会実施の意義

試行を実施した結果から、その意義をまとめると以下のようになる。

問題の実感と体験の共有

懇話会委員をはじめとするボランティアが今回の体験を通して野焼き作業の大変さ、つまり野焼きを維持している地元の人の苦労を実感することができた。

また、地元の組合員はじめ国や県・町村の関係機関及び草原保全問題に関心を持つ一般の人々も含め、この問題の解決に取り組んでいる（これから取り組みたいと考えている）人々が野焼き体験を共有することで、今後の議論のベースができたといえる。

草原問題と解決策模索の対外的アピール

多数のボランティアが体験を通して草原問題への関心を深め、有形無形の関係者の輪が広まった。

一般参加者の中には、全国各地の草原問題について造詣の深い方々もみられ、今後の草原維持議論への参加にかかわりができた。

また、新聞やテレビなどマスコミに取り上げられ、阿蘇の草原保全問題やその解決に向けて地元が動き出していることを世間にアピールすることができた。

地域に対する励まし

継続が困難になっている野焼きに関して、ボランティア参加による人手の確保という一つの可能性を具体的な形で示した。

野焼き作業の現場では域外からの参加者によってにぎわいが生まれ、交流会では、地元のお年寄りや子供も多数参加し（地元組合員約30名）、食べたり、飲んだり、おしゃべりしながら、交流が行なわれた。

地域内交流・連携へのきっかけづくり

阿蘇郡内の他の牧野組合関係者の参加も得られ、今回の野焼き体験が単なる赤水原野の野焼き支援に終わることなく、野焼き維持の問題を抱える地元の組合どうしが連携して何かを始めるきっかけづくりになった。

参加型環境保全事業の可能性と課題の検証

主催者側の協力依頼に対して、赤水原野管理組合は快く応じてくれた。また、野焼き作業や交流会で出会った個々の組合員や地元の人たちがボランティアに接する態度も好意的であり、一例でしかないが、阿蘇では、ボランティアの野焼きを支援したいという気持ちを地元が素直に受け入れてくれることが分かり、事業としての可能性が検証された。

一方、大勢のボランティアが参加する行事を実際に開催することで、ボランティア受け入れ時の問題を把握し、事業実施に当たっての課題を導き出すことができた。

3) 明らかになった関連点、課題等

管理体制

一般参加者（ボランティア）の人数管理を適切に行う必要があり、参加募集の段階から人数設定、募集方法を含めて十分な検討が必要である。

ボランティアの安全確認は不可欠であるが、今回は集合場所から作業場所へ移動したところで、連絡員によって参加申込者の名前のチェックが行われた。受付済みの人でもチェック用の名簿に名前がもれていた人がいた。終了時は個々の場所で解散となったが、ボランティアの人数チェック等はい行われなかった。

日程

地元組合員を含め多くの人々の参加を得るためには、本来は休日に実施し、しかも草の乾燥度を考えると午後からの開催が望ましい。

野焼き作業は予定より1時間ほど遅く始まった。やむを得ず野焼きの作業がゆとりのないものとなったが、それによって、ボランティアが作業や移動をせかされることはとくになかった。

ボランティアの作業範囲

まずは地元の方が火をつけるのを見学することから始まり、すぐに火消し作業に加わらなければならない状況ではなかったため、心の準備ができたところで作業に参加できてよかった。

ボランティアの役割は火消しの作業に限定されていたが、それでも森林との境界地を焼くときは、飛び火が心配で緊張感が走った。

今回は2日前までの雨で地面に湿り気が残っており、その点においては危険性が低かったため地元組合員もリラックスして作業に参加しており、ボランティアにとってはいい雰囲気だった。ただし、強風が吹いたため組合役員はその影響を心配し、例年とは異なる焼き方をした箇所もあった。

ボランティアの人数規模

今回は地元組合員とボランティアの人数がほぼ同数だったが、ボランティアは組合員の邪魔をすることなく（足手まといになることなく）、作業の手伝いができた。

緊急時の連絡通信

事前に人身事故等の緊急時連絡計画を作成した上で連絡員を各班に配置し、無線機を携帯させた。無線機の通信状況は事前にチェックしたが、当日は通信不能な場合が多かった。また携帯電話も準備したがその通信状態も必ずしもよくなかった。

実施場所の地形や植生等の条件

今回の場合作業場所は、蛇の尾地区の一部を除いて、比較的傾斜が緩やかであり、防火線も完備し、移動や作業に困難を感じなかった。

また、草丈の低い場所もあれば高い場所もあり、そのほか野草地に牧草地が混ざっている場所や林地と隣接した場所など、バリエーションに富んだ原野だったので、草原の状況の違いによる野焼きの違いが理解できるという効果もあった。

地元協力者（原野管理組合等）の組織

赤水原野管理組合は、他の組合に比べると財政的に豊かであり、組合員数規模も大きい方である。組合運営もうまく行われ、作業の指示指揮命令態勢も整っており、野焼きの人手確保も現時点では問題になっていない。このように受け入れ側がしっかりしていたため、たくさんのボランティアが参加する行事を実施することができた。

その他

一般に、同じ団体・グループからの参加者が同じ班に振り分けられると、その人たちだけで固まってしまいう傾向があるので、ボランティア同士の交流を深めるためには知らない人同士を一緒にした方がよい。また、所属や名前をかいた名札があると、知らない人にも声をかけやすい。

班の責任者（組合員）や班付きのスタッフに対して任務内容だけでなく、ボランティアへの指示の出し方などについても事前にアドバイスを与えておくと、より気楽に任務に臨め、作業もよりスムーズに進むと考えられる。

(3) 参加型保全活動のあり方と推進方策

参加型保全活動の位置づけを踏まえるとともに、野焼き体験・交流会の試行結果に基づいて、活動のあり方についての考え方を整理する。

実質的な戦力としての部隊形成

参加型保全活動の直接的なねらいは、まず草原維持作業に必要な人手を確保することにある。この意味で足手まといになるような行動は論外であり、少なくとも役に立つ働きができるように、装備の徹底や技術指導など事前の準備が必要である。また、1回だけの参加で終わるのでなく、同じ人物が同じ牧野組合に継続的に手伝いに出かけたり、長期的に経験、技術の認定などを通じ、技術の伝承や輪地切りにも出動できる精鋭部隊の育成を図っていくようなことも考えられる。

安全確保の重要性

野焼きや輪地切りは危険を伴う作業であり、牧野組合側が受け入れをちゅうちょする理由も、安全確保に対する責任の重さからである場合が多い。したがって参加型活動を推進する側では、事前の注意や保険加入、当日の体制づくりなど何重にも安全確保のための対策を講じておく必要がある。

地域主導による展開

野焼きや輪地切りはもともと一入会地の維持管理の作業であり、歴史的に形成されてきた作法や土地ごとに違うさまざまな技術があるといわれる。実施主体はあくまでも地元の牧野組合員であり、参加者はその指揮に従い、手伝いに徹することが重要である。

地域をより深く体験できる場づくり

参加者にとっても、地域が主体であることの意味は大きい。参加者は肉体的辛さや危険性を含め、地域がもつ豊かさやかかえる問題に内側からかかわることによって活動の意味づけが可能になるからである。したがって、草原にかかわる地域の文化を知る活動（例えば「北外輪・ムラごとの草の道」探訪）とセットでの「参加」なども考えたい。

多様な形態の模索

「参加型」にも、行政主導、牧野組合主導、地元活動団体主導などいくつかのタイプがあり得る。「参加」する主体も必ずしも都市住民（非農業者）だけでなく、大分県九重町で行われているように、実質的に牧野組合間で助け合うといった形も検討に値すると考えられる。ケースに応じて多様な形態が検討されるべきであろう。

参加型保全活動の推進のためには、以上のような考え方を基に実施上の留意事項等をまとめ、関係者のためのマニュアルを作成することが有効と考えられる。野焼きや輪地切りの進め方は地域によって条件が異なるが、共通して押さえておくべき点はあると思われるからだ（第 章 参照）。